



| | |
|--------------|---|
| Title | 中古日本語のトキ節に見られる文法的特徴 |
| Author(s) | 黒木, 邦彦 |
| Citation | 語文. 2007, 88, p. 45-53 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/69090 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中古日本語のトキ節に見られる文法的特徴

黒木邦彦

一はじめに

中古日本語（本稿では特に、一〇世紀から一二世紀前半にかけて、京都の貴族たちが話していたことばを指す。以下「中古語」）には、参考節との時間的関係を表す従属節がいくつかある（以下、従属節の事態を「前件」、参考節の事態を「後件」と呼ぶ）。その中で、形式名詞「とき」が承ける従属節（以下「トキ節」）は、前件と後件が同時関係にあること（以下「前件＝後件」）を表す。

（一） a この君の生まれたまひしとき、「前世の」契り

深く思ひ知りにしか「…」

（源氏、若菜上、[四]一二一八）

b 身に瘡も一つ二つ出でたり。時もいと暑し。少し
秋風吹き立ちなんとき、かならず会はむ。

（伊勢、九六段、一二一六）

c この君達の聞かましとき、もどかしと思はれまし

恥ずかしさよ。

（寝覚、卷一、六七）

トキ節の助動詞に目を向けると、（一）のように、参考節と同じものが生起していることに気づく。ただし、トキ節と参考節で一致が見られる助動詞は、相互承接における承接順位が最も低い、「とき」「けり」「む」「まし」などに限られるようである。これらは一般に、テ ns やムードなどとして範疇化される助動詞であるが、時間的に等価な節において、（一）のような現象が見られることを踏まえると、時間的な類似性を持つと考えられる。

本稿では、参考節との関係を視野に入れ、中古語のトキ節に見られる文法的特徴を明らかにする。構成は次のとおりである。まず二節では、先行研究を概観し、トキ節に関するこれまでの議論を押さえる。続く三節では、先行研究の成果を踏まえつつ、中古語のトキ節に見られる文法的特徴を明らかにする。考察にあたっては、現代日本語（本稿では特に標準語を指す。以下「現代語」）の事例を比較対象とし、それとの間に、どのような共通点・相違

点が見られるかにも触れる。最後の四節は結論である。

二 先行研究

トキ節についての論考は、現代語を対象とするものが圧倒的に多い。そこで、先行研究の概観は現代語からはじめ、その後、中古語に移る。

二・一 現代語のトキ節

本節では、現代語のトキ節に関する先行研究を概観する。

二・一節では、トキ節の「-た」の有無が、アスペクト的に機能することを確認する。二・一・二節では、トキ節が表す同時性の諸相を示す。二・一・三節では、「-た」の有無がテンスとして機能する場合について述べる。

二・一・一 アスペクト的な機能を持つ「ゼロ」「-た」

紙谷（一九七七）によれば、現代語のトキ節では、助動詞「-た」の有無（以下、形態論的な標示を受けないものを「ゼロ」と呼び、標識の一つとして扱う）によって、「将然」「過程」「既然」「完了」という、四つのアスペクト的な意味が実現するという（次に挙げる例は、紙谷一九七七、七頁の例を私に改めたものである）。

(1) a 山を下りるとき、山頂で思わぬ人に会った。

〈将然〉

b 山を下りるとき、途中で思わぬ人に会った。

〈過程〉

c 山を少し下りたとき、雨が降りだした。〈既然〉

d 山を下りたとき、はじめてその知らせを聞いた。

〈完了〉

紙谷における将然、過程、既然、完了は、限界性の面から、次のように言い換えることができる。

将然…開始限界未達成

過程…終了限界未達成

既然…開始限界達成

完了…終了限界達成

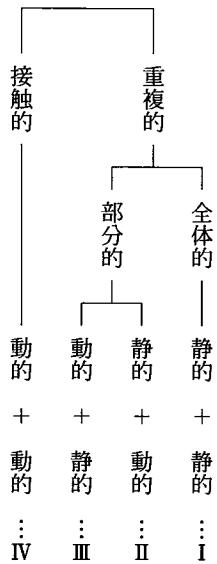
将然と過程、既然と完了は同じ標識によって表されるのであるから、前者は「限界未達成」、後者は「限界達成」としてまとめられる。神谷によれば、「寝る」のような、開始限界の焦点化が困難な動詞（金田一九五〇の「瞬間動詞」、奥田一九七七や工藤一九五九の「主体変化動詞」に相当）は、将然と既然のみを表すというが、そのような語彙的制限があるのでなら、なおさら、「ゼロ」「-た」のアスペクト的な意味を、四つに細分する必要はない。したがって、現代語のトキ節における「ゼロ・-た」の対立は、基本的に「限界未達成・達成」というアスペクト的な対立と考えることができる。

二・二・二 同母の説理

III 熊本に行つたとき、国体道路はまだ工事中だつた
IV 熊本に行つたとき、財布をなくした。

冒頭で述べたとおり、トキ節は「前件」「後件」を表す從属節である。工藤（一九九五、二四一頁以下）によれば、同時性には重複的なものと接触的なものがあり、前者はさらに、全体的か部分的かで分けられるという。この分類は、述語のアスペクト的な性格に基づいており、動的／静的（動態動詞述語で、なおかつ「ている」が標示されなければ動的、それ以外は静的）の組み合せによって、図一のようになる。

図 同時性の諸相（工藤一九九五、一四二頁をもとに作成）



例文

Ⅱ 熊本にいたとき、ファミレスでバイトしていた。
Ⅲ 熊本にいたとき、飲みすぎて救急車で運ばれた。

IV 熊本に行ったとき、財布をなくした。

接触的同時性は繼起性と近しい関係にあり、トキ節に「ゼロ」が標示されると「前件」「後件」を、「-た」が標示されると「前件」「後件」を表すことになる（「-た」は接触的同時性を表す記号であり、口の開いた方が先行）。工藤は、「重複的同時性の方はトキ（二）によってしか表せないが、接触的同時性＝接触的繼起性であるとすれば、マエ（二）あるいはアト（デ）におきかえうる場合も出てくる」（一九九五、一四三頁）とし、次のような例を挙げている（表示形式は私に改めた）。

(二) a 受話器を取る [とき／前]、一瞬祈るように目を閉じた。
b 唇が離れた [とき／あと]、女は少し怒ったような声を出した。

前節では、トキ節における「ゼロ・-た」の対立が、基本的に「限界未達成・達成」というアスペクト的な対立であると述べた。トキ節に現れる標識が、限界未達成を表す「ゼロ」であれば「前件」「後件」を、限界達成を表す「-た」であれば「前件」「後件」を表すことから、工藤（一九九五）が指摘する「前件」「後件」と「前件」「後件」の違いは、「ゼロ・-た」の対立に基づくことがわかる。

二・一・三 テンスとして機能する「ゼロ」「-た」

二・一・一節では、トキ節における「ゼロ・-た」の対立が、基本的に「限界未達成・達成」というアスペクト的な対立になるとした。そして、二・一・二節では、トキ節が表す同時性に下位分類がいくつもあり、そのうち、「前件」「後件」と「前件」「後件」の違いが、「ゼロ・-た」の対立に基づくことを確認した。

ただし、「基本的に…」という但し書きからわかるように、ト

キ節における「ゼロ・-た」の対立は、常にアスペクト的な対立となるわけではない。高橋（一九七四）によれば、連体節における「ゼロ・-た」の対立は、「非過去・過去」というテンス（絶対的テ ns）対立になることがあるという。これはトキ節にもあってはまることで、たとえば、次のような例が挙げられる。

（四） a 今度学校に来るとき、研究室で先生と会う予定だ。

b 学校に来たとき、電車の中での友達に会った。

（五） a 今日ご飯を食べるとき、僕が食器を洗うよ。

b ご飯を食べたとき、まず手をきれいに洗った。
（限界未達成・非過去）

三原（一九九二）によれば、連体節の「ゼロ」「-た」がテンスとして機能するのは、参照節に同じ標識が生起する場合に限られる

という。こうした制限の存在から、現代語のトキ節では、テンスの標示が必ずしも義務的ではないことがわかる。このことは、次の例からも知られる。

（六） a 風邪で寝込んでいる／寝込んでいたとき、彼女がお見舞いに来てくれた。

b 受験を控えて、精神的に「つらい／つらかった」とき、彼女が励ましてくれた。

二・二 中古語のトキ節

二・一節で見たとおり、現代語のトキ節では、テンスの標示が必ずしも義務的ではなく、「-ている」はもちろんのこと、「ゼロ」「-た」も基本的にアスペクト的な意味を表す。トキ節における「ゼロ・-た」の対立は、接触的同時性の違いに直結しているのであるが、中古語のトキ節においても、これと同様の現象が見られるか否かが注目される。

井島（一九九二）の調査によれば、上代・中古語のトキ節には、いわゆる〈完了の助動詞〉の「-き」「-けり」も問題なく生起するという（過去の助動詞）の「-き」「-けり」も問題なく生起するという（ゼロ）の例ももちろんある。井島はこのデータをもとに、上代・中古語のトキ節について考察しているが、参照節の標識を観察していないため、トキ節に生起した標識が、どのような意味・機能を持つかの検証が困難である。

現在のところ、文法的な面から中古語のトキ節について論じた

ものは、井島（一九九一）以外にないようである。次節では、先行研究の成果を踏まえつつ、中古語のトキ節に見られる文法的特徴を明らかにする。考察にあたっては、現代語の事例を比較対象とし、それとの間に、どのような共通点・相違点が見られるかに触れる。

三 中古語のトキ節に見られる文法的特徴

本節では、中古語のトキ節に見られる文法的特徴を概観する。三・一節では、トキ節と参照節に現れるテンス／ムードの標識が一致することを確認し（三・一・一節）、その現象に対しても説明を試みる（三・一・二節）。三・二節では、中古語のトキ節が表す同時性の諸相を観察し、現代語との違いを指摘する。

三・一・一 テンス／ムードの一一致

中古語のトキ節に見られる文法的特徴として、第一に挙げられるものは、一節で見た、参照節との標識の一一致である。

（七） a この君の生まれたまひしどきに、[前世の]契り

深く思ひ知りにしか_[…]

（源氏、若菜上、四一二八、（一a）再掲）
b 身に瘡も一つ二つ出でたり。時もいと暑し。少し
秋風吹き立ちなんとき、かならず会はむ。

（伊勢、九六段、二二六、（一b）再掲）

c この君達の聞かましとき、もどかしと思はれまし
恥ずかしさよ。（寝寢、卷一、六七、（一c）再掲）
d 声ふりたてて遊ぶときに、大空に音声樂して、紫
の雲に乗れる天人、七人連れて下りたまふ。

（うつほ、俊蔭、「一」二一九）

（一）には挙げなかつたが、分布を見る限り、（七d）に挙げた「ゼロ」もこの現象に関係するようである。結局、参照節との標識の一一致に関わるものは、承接順位が最も低い「-き」「-けり」「-む」「-じ」「-らむ」「-けむ」「-まし」に、無標の「ゼロ」を加えた合計八つということになる（以下、この八つの標識を「テンス／ムード」、参照節との標識の一一致を「テンス／ムードの一一致」と呼ぶ）。

なお、テンス／ムードの一一致にあたる例は、（七）のようないくつか節と参照節に同一の標識が生起するものに限らない。テンス／ムードは時間的な意味によって、

非過去…「ゼロ」「-む」「-じ」「-らむ」

過去…「-き」「-けり」「-けむ」

反事実…「-まし」

のようく分類されるが、この分類において同類とされるもの同士であれば、テンス／ムードが一致しているものと見なす。たとえば次のようにある。

（八） a 家といふものは、券持たる人より外に領る人なき
と聞きしかば、おだしう思ひて、あるは、我が家

とも名乗らであります。[中納言が] かうした

まふ「[二]三条邸に引越しようとする」ときこそ、

「かかることどもありけり」とも言はめ。

(落窪、卷三、二八三)

一 かかることどもありけり…そいえ、三条邸の地券は、これこれの事情で自分の手元にあるのだった。

b 北の方、琴遊ばすこと、昔大将の大臣に對面したまひし山に住みたまひしどき、彈きたまひけるまに「…」 (うつほ、尚侍、[二]二五〇)

三・一・二 現象に対する説明

かつてのことではあるが、前節で述べた定義に基づき、テヌス／ムードの一致がどの程度見られるか調査したところ、四〇〇例を越えるデータのうち、九割以上でこの現象が確認された³³。この結果は、井島（一九九一）の仮説を検証するための材料となる。井島は、「トキ副詞節は現代語においては主節に對して従属節〔従属性の誤り—黒木注〕が高いと言えるが、上代・中古語においては主節「本稿の参照節に相当—黒木注」に對して独立性が高く、場合によってはほとんど等位に立つていい」という考えに立ち、古典語のトキ節と現代語のトキ節の従属性（統語構造ではない点に注意）の違いを、次のように表現している（表示形式は私に改めた）。

(九) a 古典語

〔副詞節〕 とき — [主節]

b 現代語

〔副詞節〕 とき [主節]

二・一節で述べたとおり、トキ節のみの調査による、井島の説は、あくまで仮説に過ぎない。参照節との関係に目を向けることではじめて、その真偽が明らかになるのである。

四〇〇例を越えるデータの九割以上で、テヌス／ムードの一致が見られるという結果から、井島の仮説は正当と見てよい。中古語におけるトキ節の従属性は（九a）のようであるから、それぞれの節にテヌス／ムードを標示する必要がある。このとき、二つの節に現れる標識が時間的に類似するのは、トキ節が「前件＝後件」を表す従属節だからである。

三・二 接触的同時性

二・一・二節では、現代語のトキ節が表す同時性に下位分類がいくつもあり、そのうち、「前件＝後件」と「前件＝後件」の違いが、「ゼロ＝一た」の対立に基づくことを確認した。

ところが、中古語のトキ節においては、「前件＝後件」と「前件＝後件」の違いを標示する方法がないようである。

(一〇) a 「今、この琴いとよく習はせたまひてんときには、渡りたまひて、もろともに御覽せむ」とぞのた

まひし。 (うつほ、樓の上ト、[三]五一五)
b この帶、右の大臣の内裏へ参りたまへらんとき、
蔵人所に持て行きて、「売る物なり」とて出だ

せ。 (うつほ、忠こそ、〔一〕一二四)

(一一) a 「私=内大臣が」源氏の入道の一家に侍りしほ

ど、出家しはべりしとき、「…」と、泣く泣

く遺言せられしに「…」(寝覚、卷四、二九二)

b 「北の方が絹五〇匹を」取らせたまふとき、
〔博打〕「いと易きことにはべり」とて去ぬ。

(うつほ、忠こそ、〔一〕一二五)

a 声ふりたてて遊ぶとき、大空に音声樂して、

紫の雲に乗れる天人、七人連れて下りたまふ。
(うつほ、俊陰、〔一〕一九、(七d) 再掲)

b 久しくこのわたりに見えたまはず。ここには、
月の宴したまひしときに、消息言はせたまへり
し。
(うつほ、藏開上、〔一〕四一〇)

(一〇) のように、「一つ」「一ぬ」「たり」「り」といった、形態

論的に有標のアスペクト標識が標示されると、必ず「前件」(後

件)を表すが、「ゼロ」の場合は複雑である。限界動詞の場合、
(一一a) のように限界未達成を表すこともあるが、大抵は(一
一b) のように限界達成を表す。非限界動詞の場合、(一一c) の
ように、必ず限界未達成を表すようである。

そこで、トキ節の述語を、a) 動詞分類(限界動詞/非限界動
詞)、b) アスペクト標識、c) テンス標識の三点に基づいて分
類し、そのアスペクト的な意味が、限界未達成と限界達成のどち
らになるかを調査した。その結果を表一に示す。

表一 トキ節のアスペクト的な意味

| 合計 | 非限界動詞 | 動詞分類・アスペクト標識・ 限界性・テンス標識・ 限界未達成 | | ゼロ 一 ム 一 キ ゼロ 一 ム 一 キ | 一つ、一ぬ、たり、り 一 つ 一 ぬ 一 たり 一 り | 合計 |
|----|-------|--------------------------------------|------|--|---|--|
| | | 限界未達成 | 限界達成 | | | |
| 40 | 0 | 0 | 12 | 26 | 2 | ゼロ 一 ム 一 キ ゼロ 一 ム 一 キ |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | ゼロ 一 ム 一 キ ゼロ 一 ム 一 キ |
| 14 | 0 | 7 | 6 | 1 | 3 | 0 |
| 3 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | ゼロ 一 ム 一 キ ゼロ 一 ム 一 キ |
| 18 | 0 | 0 | 0 | 17 | 1 | ゼロ 一 ム 一 キ ゼロ 一 ム 一 キ |
| 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | ゼロ 一 ム 一 キ ゼロ 一 ム 一 キ |
| 76 | 0 | 19 | 53 | 4 | | ゼロ 一 ム 一 キ ゼロ 一 ム 一 キ |
| | | | | | | 合計 |

本節の冒頭で述べたことは、表一から確認できる。中古語のトキ
節においては、「前件(後件)」と「前件(後件)」の違いを標示す
る方法がないのである。

四 結論

本稿では次の二点を明らかにした。

(一三) a 中古語においては、ほとんどの場合、トキ節と
参考節のテンス/ムードが一致する。よって、
井島の仮説どおり、中古語のトキ節は従属度が
低い(独立度が高い)と見てよい。
b 中古語のトキ節には、「前件(後件)」と「前件
(後件)」の違いを標示する方法がない。有標の
アスペクト形式が標示されると、必ず「前件(後
件)」を表すが、「ゼロ」の場合は複雑である。

(二三) が他の従属節にも通用するかについては、今後追及していく必要がある。ただ、トキ節以外でも、時間的に等価であれば

テヌス／マードの一致が見られるようなので、(二三)a) の指摘は、中古語の統語論に対する貢献が期待できる。

(1) 時間的な面で従属節が参照する節。終止法の述語をとる主節とは、必ずしも一致しない。

(イ) 北の方、琴遊ばすこと、「昔大将の大臣に対面したまひし山に住みたまひし」とき、「彈きたまひける」ままに、その後さらに住みたまひける世に、手触れたまはず。

(うつぼ、尚侍、「二二」一五〇)

(イ) における主節は「手触れたまはす」であるが、トキ節が時間的に参照している節は「弾きたまひける」であるから、これが参照節となる。

(2) 言語学研究会・構文論グループ(一九八九)における〈未完結〉と〈完結〉の区別はこれに近い。ただし、彼女らは、紙谷が言うところの既然にある、〈継続〉という意味を立てており、この点で本稿とは異なる。

(3) 調査文献は次のとおり。「伊勢物語」「落葉物語」「うつぼ物語」「源氏物語」のテキストは、言語資料に挙げたものと同じ。他は全て『日本古典文学大系』(岩波書店)。『竹取物語』『伊勢物語』『土佐日記』『平中物語』『落葉物語』『かげろふ日記』『うつぼ物語』『大和物語』『枕草子』『源氏物語』『紫式部日記』『菜花物語』『和琴式部日記』『浜松中納言物語』『夜の寝覚』『更級日記』『狹衣物語』『大鏡』『童物

(4) 形式名詞「のち」が承ける従属節(以下「ノチ節」)について

言えば、ノチ節に「一き」「一けり」、参照節に「ゼロ」が標示されるという例が多数ある(黒木一〇〇七参照)。これは、ノチ節が、前件と後件の継続関係を表す従属節のためだろう。

注

言語資料

伊勢物語(一〇世紀前～中?)：『日本古典文学全集』八、小学館

一九七二、福井貞助(校訂)、底本＝伝定家筆本

落葉物語(一〇世紀後)：『日本古典文学全集』一〇、小学館、一九

七二、三谷栄一(校訂)、底本＝実践女子大学図書館蔵本(旧安

田文庫蔵本)

うつぼ物語(一〇世紀後)：『新編日本古典文学全集』一四、一六、

小学館、一九九九～二〇〇二、中野幸一(校訂)、底本＝前田家

本

源氏物語(一世紀初)：『新編日本古典文学全集』一〇～一五、小

学館、一九九四～九八、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出

男(校訂)、底本＝伝明融筆臨模本・大島本・伝定家筆本

引用文献

井島正博(一九九一)「古典語におけるトキ副詞節」、『国語学会

一九九二年度春季大会予稿集(於筑波大学)、国語学会

奥田靖雄(一九七七)「アスペクトの研究をめぐって—金田一段階—」、

『国語国文』八、宮城教育大学『再録』：『ことばの研究・序説』、

八五～一〇四頁、一九八四

紙谷栄治(一九七七)「助動詞「た」の一解釈—形式名詞「とき」について」、『京都府立大学学術報告 人文』二九、

一～一〇頁、京都府立大学

- 金田一春彦（一九五〇）「国語動詞の一分類」、『言語研究』一五、日本言語学会「再録：金田一春彦（編）『日本語動詞のアスペクト』、五〇、六〇頁、むぎ書房、一九七〇」
- 工藤真由美（一九九五）「アスペクト・テンス体系とテクスト—現代日本語の時間の表現—」、ひつじ書房
- 黒木邦彦（二〇〇七）「中古日本語におけるアスペクトとテンスの相關—主節とノチ節の考察から—」、『国文研究』五二、八五〇—二〇二頁（左開き）、熊本県立大学
- 言語学研究会・構文論グループ（一九八九）「接続詞「とき」によつてむすばれる、時間的なつきそい・あわせ文」、言語学研究会（編）『ことばの科学』三、一一九〇三四〇頁、むぎ書房
- 高橋太郎（一九七四）「連体形のもつ統語論的な機能と形態論的な性格の関係」、『教育国語』三九、むぎ書房「再録：松本泰丈（編）『日本語研究の方法』、一三三—五八〇頁、むぎ書房、一九七八」
- 三原健一（一九九二）『時制解釈と統語現象』、くろしお出版